
鳩鳴《やみょう》の刻《とき》

天月黎璽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鶴鳴の刻

【Zコード】

Z0123F

【作者名】

天月黎璽

【あらすじ】

「鶴鳴村」この村には「丑の刻に虎鶴が鳴くと、それが鶴を呼び、魂を奪つてゆく」という言い伝えがある。その夜、言い伝えは現実のものとなり、村は恐慌状態に陥る。偶然にも村を訪れていた「あの男」は、この怪奇現象には何かあると考え、村に伝わる「言い伝え」と村で起こる「怪奇現象」に挑む

山の二人

時は平安時代末期。夜な夜な丑刻になると、近衛天皇の御所・清涼殿に東三條の森から黒雲と共に「鶴の声で鳴く得体のしれないもの」が現れ、天皇は恐怖していた。遂には天皇は病の身となつてしまい、薬、祈祷をもつてしても効果は無かつた。そこで側近たちは、かつて堀川天皇の時世に「源義家」が弓を鳴らし魔除けをすることで怪事を解決した前例に倣い、当時、妖怪退治の第一人者であり弓の達人であった「源頼政」に怪物退治を命じた。ある夜、頼政は郎党の「猪早太」連れ、先祖の「源頼光」より受け継いだ弓を手にして怪物退治に出向いた。すると清涼殿を不気味な黒雲が覆い始めた。頼政は弓を引くが、黒雲の何処を狙えばよいのかわからない。しかし、黒雲が月に重なると中に何かの影が見えた。頼政がその影へと山鳥の尾で作った尖り矢を射ると、悲鳴と共に怪物が二条城の北方へと落ちた。すかさず猪早太が駆け付け、怪物を取り殺し、太刀で止めを刺した。退治した怪物の身体は、ばらばらに切り刻み、籠の小船に乗せて海に流したという。

人々はこの怪物を、「鶴の声で鳴ぐ」ことから「鶴」と呼ぶようになり、その姿を「顔は申、胴は狸、手足は寅、尾は巳」とした。その鳴き声は「聞く者の心を蝕み、取り殺し、魂を喰らう」と伝えられている。

随分と永いこと歩いている。山道を歩けども歩けども、目的地に着く気配は無い。案内人が先導してくれているのだが、何分、その歩は早く、目の前に現れる小枝を振り払い、霞がかつた大気を振り払い、這這の体で付いて行くのである。

「すみません。村までは、あと、どの位でしょうか」「もうすぐですよ」

私の声は、息切れを起こして、雑音の様である。

案内人の声は、私と違い、はつきりとしていて、疲れなんてものを微塵も感じさせなかつた。

「はあ。いや、さつきからずっと山の中を歩いているじゃないですか。なんだか、少し心配になつてきちゃつて。ああっ！別に、道に迷つたんぢやないか、とか思つてませんよ。ただ、さつきから回りにあるのは、木、木、木…木ばつかで、なんか、こうも人影と言つか、人の気配と言つか。そういうものが、余りにも無いもんで。なんだか、こう…寂しいような、心細いような。ねえ？ そうなりませんか？」

案内人の振り向いたその顔は、にこやかだつた。

「ははは。確かに。もう随分永いこと、この山に入つている私だけ、未だにそなるんですから。初めて訪れた人なら、尚更のことでしょう」

そう言つうと、年老いた、だが逞しい先導者は、力強く山の土を踏みしめていつた。その姿を見ているだけで、不思議なものだ。内から元気が沸いてくる気がした。私も負けじと、「よしつ」と氣合を入れ、その後を付いて行く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0123f/>

鶴鳴《やみょう》の刻《とき》

2010年10月14日12時49分発行